

ソーブランド・マヤ

「あ、ようこそー、マヤと申します。お見知りおきをー。」

フェミニンさを強調した、胸元までかかるしっとりつややかな茶髪の上からアラビアンナイトのヒロインめく薄い紗のベールに金細工の華奢なりング冠を被ったエキゾチックな美女が階上へ通じる階段の途中、踊り場のような壇に正座し、満面の笑顔を傾けて大仰にかしこまり、三つ指ついた。

四〇過ぎの落ち着いたサラリーマン風の男が、口をあけたまま階下の上がりぐちに棒立ちになったのは、正面に見た凄艶な仇花のえろさと美しさに度肝を抜かれたらしい。ここはソーブランドといわれる遊興店だから、お目当てのソーブ嬢もそれなりにセクシーな装いで現れるだろうことは想像できたはずだけれど……。マヤが顔をあげると、男は初見の、目を合わせたときのちよっとした驚きの表情がまだ凍りついたように残っている。折り畳んでいても余分な肉がほとんど見られない、アラブ種の競馬馬を思わせるなま脚のひざ小僧から太腿へ視線を移し、その優雅ですべらかな肉感に生唾を呑んでから視線を正面へ戻し、ようやくひとこと、

「ああ、マヤさんかい。よろしくね。『やまさん』って呼んどくれ。」

やまさんと名乗った男、予約の時刻午後八時半を三十分近く待たせた客にしては文句も出さず、マヤは初見の客に対する内心の緊張を半ば解いて相手の視線を心地よく受けた。顔にかかった髪を両手で振り分け、内腿をびったりつけたままゆっくり自然なしなをつけて、腰を僅かに振って膝立ちになる。それでローライズの金鎖りの飾り帯で留めた超短い紗のびらびらしたフレアスカート、しかもその前が途切れて大きく開いたあたり、インナーらしい赤いトングビキニから股間へかけての露出を恥らうように垂らした一条の細い金の織りひもが揺れる、そのあやうい景色が視界にあらわれた。見つめる男の突き出た口から言葉にならない吐息が漏れる。殆ど化粧をしない素顔に近くせに妙に華やかな笑顔の彼女が、華奢な両肩胸元むきだし印象はその間に仄見える、真っ白い双の乳房を隠しきれないボトムとペアの派手な赤いレースのハーフブラジャア、その上に羽織った、びらびらしたこれも薄い紗のミニジャケットの存在感のなさゆえだろう。すそから下に露出した胸郭に透けて見える肋骨がいじらしいほどの痩せた体躯と締まったこぼらみぞおち、きりと挟れたへそ、上半身がスレンダーな割りにはよくアクセントのついた腰周りの角度に引っかかるようにまつわったかたちだけの紗の透けたマイクロスカーートの乱れをちよっと気にして押さえる風情に、男の目が更に丸くなり、既に鼻の穴も広げて催しているのがはっきり見て取れる。

第一印象での高得点を確信したマヤはありつたけの笑顔で、

「あら、ずいぶん奥ゆかしくていらっしゃるのね、やまさんは。おまたせした分待ちきれずに、そんな段など飛び上がってあたしを抱きすくめられる殿方もいらっしゃるのよ。さあ、いらして。」

と言いながらマヤは真つ白い両手を差し出した。男が苦笑しながらそれでも余裕をもってフロアから中段へ上がって来るのにあわせてマヤは立ち上がった。その脂ぎった両手を掴み、残る階段を男とともに足並み揃えて上がる。そのまま部屋へ案内するマヤはそつと上目づかいでしおらしく男に視線を向け、その細身を自然に寄り添わせた。

マヤは素足だったけれど、68はあるので店で履き換えたサンダル履きの客の視線を下に見ることも多い。しかしこの男はがっしりした体格で、目線がマヤの頭頂あたりになる、75以上だろう、かなりの長身だ。しっかりした仕立ての背広の男が戸惑いつつもその視線の向かうところ女の装飾過多という印象のわりには肌身の露出の多い、実は裸に近いからだを興味深く無遠慮にながめながら右手であちこち触れ愛撫しつつ最後に後ろから腰のくびれに腕を回し、むきだしの肌身の触感を楽しみつつ体をぐつと引き寄せた。自然でしかもその歩みを妨げないのは、なかなかこんな場所に馴れた人間なのかと思わせる。最初の初心な印象とはちよつと違った。端正な優しい容貌に似ず案外あそび人なのかもしれない。そのほうがむしろ彼女たちには気苦労が少ないのだ。薄暗い無人の廊下を奥まった自分の個室へ案内する間、男のやに臭い荒々しい息がマヤの額にかかり、自分がじつとりと眺められていることを知る。

「綺麗だし、可愛いねえ。」

じつと見つめてやまさんが言う。

「なじみだったら抱いてキスでもしたい気分だ。」

「ありがと。やまさん、好き。」

言いながらもちよつと違和感。玄人っぽい。ううん、これは結構疲れる客かもしれない。すでにこの道三年目、連日数え切れない男に身を任せ、今日も6人目の客を迎えるマヤだったけれど、初めての客はやはり緊張する。なにしろ二人は今日が“初夜”なんだし。そこで気になる一言。

「初見で自然に笑う子って、俺的にはいまひとつなんだけど、マヤは笑顔も綺麗だから、いいよ、許す。」

あれ、褒められてんだか、どうか。マヤはどうしていいか分からなくてちよつとまじめな表情になった。マヤはまだ不器用な面も多い。ややあつて更に、追い討ち。

「温気がするねー。」

とやまさんはつぶやいた。

「何人取ったの、今日は。」

さほど難詰するような口調でもなかったけれど、マヤのずぶとい心臓と、激しかった前客の記憶でなお疼きが収まらない花卉が一瞬ぴくりと痛んだ。無神経な男だ。たとえば普通恋人など（とのベッドインの前）には絶対問わないことだった。どんな気分で訊いているのだろう。数少ないマヤのこだわりの長い髪、乳首にまで届くので当然ながら毎回びしょ濡れになる茶髪が乾ききっていないのを遠まわしに指摘したのだろうか。

まだベテランの域には届かないものの、お店で一番の人気と実績で十分自信をつけたマヤ

だったけれど、おまえは娼婦なんだ、そうだろう、ということをはほとんどストレートにつかれたようなこの言葉はやはり愉快ではないし、客も、これから抱こうという女が最前まで別の見知らぬ他人に揉みただかれ煽られてひいひい喘いでいたのかというようなりアルな想像は(普通なら)したくもないはずだ。どうこたえればいいのか。

「…、ふふ。」

さあ、どうでしょ？でも、そんなことを思っただけで却って萌えるマゾ男もいるのかもしれない。本当に知りたいのなら正直に教えてあげるけれど、前の客の性態などを。マヤが少々戸惑いながら笑ってごまかそうとして、すぐ内心ひやり。あ、これもご法度？

案の定やまさんいたってまじめにたたみかけて、

「こんな時間だし、三十分も待たせる売れっ子のマヤさんが、まさかくちあけだとは思わないけどね。」

そう言いつつすと一方の手指をなにげもなくという感じで股間へ伸ばし、垂れた金鎖をさばいて指一本ほどのボトムの間隙から薄布ごしに前へ軽くさすりあげた。

「ここ、見りやア、大体分かるんだけど。」

いずれここでのフォーマルな衣裳とはいっても、見せパンティ一枚の無防備なマヤだったから、拒むこともできず虚をつかれた感じでなされるまま肩をすくめ、ひゅつと息を鳴らして悦ぶしぐさが無意識に出る。

うん、房事に手馴れた男なんだ。

「本当？じゃあ、しつかり見せたげるから楽しみにしておいて、ね。」

「ちゃんと当てたらなんかご褒美くれるかい？」

「ふふ、考えとくわ、お楽しみにね。」

マヤは大呉都温泉では名の知れたソープ嬢。彼女が勤める店「タブー」一番の売れっ子だ。基本的に4日出て2日休む彼女の出勤日は正午12時の開店から午前2時まで、大抵はすつかり予約指名で詰まる。こんなメンバーはここにはいない。大方は切れ目なく7人から、休日前の多い日は時間延長もあって10人の客をこなす。月20日は働くのでかなりの実入りだ。それに休みの日も1日は店外デートで稼ぐことが多い。日曜や祝祭日以外はほぼゆつくりできる同僚はマヤの人気をねたま一方、そのタフさぶりに、どうしてそんなに働くの？と驚くやら呆れるやらだけれど、中学教師時代の過ちからつくってしまった5千万の借金を抱えて、よんどころなくこの世界へ入ったマヤには何が何でも金がある。こんなところで働く女たちは大抵わけありなのだろうけれど、マヤも例外ではないわけだ。

初見の客はよくそんなマヤの身の上や年齢、出身地などを訊くものだけれど、やまさんは最初のぶしつけな質問のあとそんなプライベートのことは何も聞かなかった。もちろんマヤも客のことにはふれない。

「『タブー』って、やっちゃあいけないことのことだろう？なんか、凄いいことでもやってくれるの？」

「そうよ。口にはとても出せないことなど、ね。楽しみにしといて。それより、どうして私のこと、知ったの？ インターネット？ 新聞？」

マヤは全裸画像の紹介を店のサイトに出している。もちろん顔も自慢のDカップもすっかり晒しているのだ。そんな思い切った宣伝も彼女の人気を高めていることは確かだろう。ローカルの新聞と雑誌にも時折り店の広告塔として顔写真を載せている。当然マヤの実入りにもなる店の宣伝だけれど、メジャーの雑誌グラビアに出ても有名モデルとひけをとらないマヤの美形が店のイメージを高めていることは間違いない。そのために多くの半信半疑の初見客が生まのマヤを目前に見て感動するほどだ。やまさんもそうだったのかとマヤは思った。

「いや、違うね。悪友から聞いたんだ。あんたのこと。安い店にらしからぬハーフのような美女がいるって。」

大呉都温泉はマヤが勤める「タブー」以外にも何十軒とその種の店が軒を並べるソープ天国であり、全国に名の通った高級店から、並みの金額を提示する大衆の店まで様々なものけれど、「タブー」は中の下といった料金設定なのだ。もちろんマヤも報酬のシステムで同僚と差はない。マヤがハーフ？と言われるのは珍しくはないけれど、もちろん彼女は純粋の日本人だし美女の格付けはハーフかどうかには関係がないと思っっている。もつとも、商売女へのお世辞の意味にも使われるらしいその言葉の意味するところはマヤも自覚している(お座なりの世辞でもないと思う)：マヤは早見ユウちゃん似の切れ長の大きな瞳に愛嬌もたつぷりの申し分ない美女だったし、その明るくてしかも眉根のせまった深みもあるプロフィールにおおかたはエキゾチックな感じを持つのだろう。(悪い気分でもない。そんなことよりも、安い店には美女が居ないという決め付けには、同僚のためにもちよつとひっかかる(たしかに、この店でマヤはだんごの美女ではあるけれど、他にも美女は多い。店以外で公開していないだけだ。

「あら、そんなことー。やまさんのお友達には感謝だけど、ちよつとがっかり。まるで私が大安売りしているみたいじゃあない。」

「いや、サイトも見たよ。でも、実物はまた、聞きしに勝る美女だって、びっくりしたんだ。売れっ子にしては気立てもいいっていう評判だし。俺にも、しっかりサービス頼むね。」男は1万5千円のサービス料に2万円を出して、キーブ・ザ・チェンジ！ だって。これから90分間の私のレンタル料だ。やまさんは結局入浴料込みで3万円払ったことになるらしい。褒められて、チップもたんまり。マヤのモチベーションがあがらないはずもない。うう、やまさん、好き！

マヤは専用の個室、職場を持っている。厚い扉を開いて男を先に押し込み、自分も入って内錠を閉めるともう誰にも入られない、声も通らない、外部とのつながりは事務所に通じる電話器だけという密室の愛しあう男と女ということになる。最初のころは初見で二人きりになるのにちよつと不安になったこともあるけど、たくさん男を経験した今は、想像

と実際の差の見極めも出来て度胸がついたということか。なーに、どうせ男のやることは決まっているんだ。

ドアを入りすぐそばのフローリングで女が主導して衣服を脱ぐ。脱いでいる間中ちらちらと挑発的な流し目で男の気分を高める。やまさんは脱ぐのを途中で止め、もっぱら相手を鑑賞中。

マヤが脱ごうとしているのは一応店のフォーマルな制服なんだけれど、女性たちも自分の好み個性に応じて多少はアレンジしている。頭のベールを髪に合わせて多少長めにし、ミニジャケットはブラジャアの補助をするだけの小さな薄布、小気味よく後ろへ張った小尻を隠すだけのマイクロスカートに到っては、眼を引く彼女のチャームポイントのまっすぐな垂涎のおみ脚すべてを股下から見せつける、しかも正面スリットが腰周りの3分の1近くオーブンなので前は下着そのまま、わずかに細い腰帯からの下げ飾りが視界の邪魔をするエレガンスという趣向。それらの5点セット、頭頂のヴェールと金線の冠、上衣のかわりのミニジャケット、腰の帯とスカートも取って、最前から透けて見えていた赤いレースのブラジャアとトングのひもパンティだけになる。そのストリップショウをそばでじろじろ見られるのを容認するもサーヴィスのうち。マヤはこの道3年目、自分の身体を恥じらうことはなくなっている。

あつけないショウが終わって、一步離れた位置からやまさんがしげしげと見る。

「尻出しのほかは最初とあまり変わらん風情だなあ。」

「ふふ…。」

「このかっこうじゃあ、ロビーへは出られないしね。」

「あれで正装だったのか。あきれたね。」

「外出はできないけど、一応はこのフォーマルドレス。」

「ま、こうなりや、間違いなく下着だからな。」

最初のエロチックなお目見えコスチュームがかもし出していた優雅な印象は確実に等身大フィギュアのような彼女の裸身そのものの美質に変わった。

見事なDカップを強調する赤いノーカップのブラジャーも、隆い恥丘を半分以上見せている極小ヒモショーツ（前は多少布がある）も、特徴を隠すというよりそこへ視線をひきつけるためのマーキングに近い。その“下着姿”のまま笑顔を絶やさず男の脱衣を促し、ボディタッチも頻繁にそばで手伝う。男が脱いだ高級地の背広を受け取ってハンガーに通し、ロッカーにしまう。アットホーム的なリラックス感。

「マヤさんは、本当に可愛い、いい奥さんになりそうだな。背広のしまい方なんか見てたらそんな気がしたよ。」

「ありがと。少なくともセックスプレイはプロなんだし、奥様よりも上手でなきゃあね。」

ふふ、可愛い教え子を迷わせて自殺に追い込んだえろ教師と言われたもんね。無罪にはなつたけれど親に示談金を払う裁定を受け入れた私は、教師免状を返上して村社会から去つた。その時点で私のフツウの人生はなくなつた。つまり、それは前世での話。

男が残る下着を脱いでいる間に、シングルの簡易ベッドを右手に見ながら風呂場で湯の準備を済ます。あらかじめ新しい湯を注いであった湯舟の湯加減を見る。

奥の洗い場と中央にある深い和風のバスタブが最初のマヤの戦場になるわけだ。

「君の2年ごしのファンがいてね。免許証を提示したら純ナマが出来るってのが気に入ったって。もちろん、高級店に比べて通い易いともいってたな。でも、マヤくらいになったら、一流の店からいろいろお誘いが来ないのかねえ。」

マヤは最近珍しい、純ナマを売りにしているソープ嬢だった。ことのあと丁寧に洗ってはいけるけれど、彼女の子宮頸あたりには確実に前客のザーメンの残渣が残っているはずだし危険な病気の持ちまわりだって可能性0ではないだろう。ま、それはお客さまにも当然、事前了解事項なんだし、すこぶる付きの美女を楽しむのにスリルはつきものだろう。

彼女の人気で「タブー」は結構店としてもはやっているようだ。それで彼女を他の高級店が引き抜きにかかる。なにしろ高級店は入浴料金からして違い、まるままと自分のものになるサーヴィス料も今の店の倍からの収入が約束されるはずなのだ。他にも休みを増やすとか、甘い条件が提示されたに違いないのだけれど、マヤ自身一向に乗る気配はないのが周囲には奇妙に見えるのかもしれない。

「ま、なくもないけど、わたしはここが気に入っているし、おっくうなのよ、いまさら動くのは。ま、めんどくさがりなのね、私は。」

もちろん周囲の口さがらない噂は彼女の底知れない男好き、ニンフォマニアがその理由だということになっているけれど、本当はどうなのか。

ぶっちゃけていうと、マヤはこの「タブー」の建物の中に別に1室貰って住み込み、職住一体ということになっている。「タブー」のほうだってマヤには居てもらいたいので彼女に特別待遇の身分を授ける。プライベートも安全で通勤時のストーカーに気を遣う必要もないし、この利便さと生活費の格安さが彼女をなかなかここを出る決断へ至らせない理由でもある。お給料はあがっても現在の生活をがらりと変えようと、2年間で半分以上の借金を返済した。ペースがむしろ維持できなくなるかもしれない。いったんはひと財産を築きながら浪費で身を崩した同僚をマヤも知っている。単純な計算ばかりではないかいないところが浮世の難しさだ。

彼女の人気は、予約を取らずに指名が殆どできないことから分かる。いまだき珍しい純ナマが出来るという売りだけれど、そのサーヴィスを受けるには本名を名乗らねばならない。もちろんそれは実際に店に来た時の客自身の写真つきID、おおかたは免許証なんかでマネジャーが確認することになる。ちょっとひるむ客も多いだろうけれど、それで彼女がなお繁盛しているのは、やっぱり彼女自身の魅力が並ではないからだろう。

もちろんD確認はマネージャーが受け付ける時のその場かぎり、マヤ自身が確かめることではないし、あと尾をひくこともない。結局これは客と店、そして彼女との信頼関係がすべてなので、一度すませばあと常連客にはもちろん不要なのだ。もちろんそんな微妙なことをネットには流せないけれど、ロコミで広がっている。

裸になったやまさんがバスタブに大きな体をひたしている間に、すばやくマヤはブラジャーもパンティも取って、彼女たちの実働ユニフォーム、つまり生まれたままの姿になり、湯舟から食い入るように見つめている男のそばへ近づく。すでにネットで公開している彼女のおなじみの裸体だ（闇サイトではしつかりボトムも見れるという噂もある）。確かに当世風に痩せてはいるけれど出るところはしつかり出た見事なプロポーションで、セクシーでもある。真剣に眺める男のために数歩前でちよつと気取ってポーズをとる。くるりと一度回ってみせる。胸元ちかくまでのフェミニンな髪が周囲に広がって顔に巻きつく。マヤは入浴サービスでも髪をアップにしない珍しいソープ嬢なのだ。

「マヤ、いいなあ、いいよお。おっぱい張ってるし、細い腰と尻のアクセントも見事だし、太もも脚もすんなり、最高だなー。」

これほどあけすけにマヤを賛美する男も余りいない。若い男など最初のうちは照れくさいのか見て見ぬふりをするのが大半だ。もつとも、時を経ず次第にずうずうしくなってくるけれど。見られる方のマヤも、今はまったく平気、むしろ誇らしい心境ではあるけれど、多少は演技半分の恥じらいを含んだ動きを心がける。身体を自慢げに見せ付けるのも常識的な男にはそれに乗っていけず戸惑いがあり、いずれ娼婦なのだという気分からどんな破廉恥な女かと進んで、見るものの恋情（やる気）が冷めるものだ。なによりもやまさんと初体験なので好みが変わらない（ちよつと複雑そう）。相手の反応を探って確かめつつマヤは控えめに振舞う。

マヤは下つきで、よほどのローアングルでなければ普段前からはわずかな恥毛の他いわゆるらくだの爪、凹みもわずかでそれ以上のセックスは見えないのだけれど、当然バスタブのふちにあごを乗せたやまさんの目線からは陰唇全体しつかり見えたはずだった。マヤは一歩手前で恥らうように浴槽の横にしゃがみこんで男と目を合わせる。

「どう？分かった？」

最初約束したクイズ、やまさんで今日何人目の客なのか、という問いかけだ。案の定やまさんは即答できない。首をひねる。

「うん、ビミョウだな。もつとよく見せてよ。座って、開いて。」

「嫌よ、どうせ分らないんでしょ。見たら分かるなんて、冗談ばかり…」

「分かるんだよ俺は。マヤのまんこをよく見たいってこともあるけれどさ、それ以上に、おまえの恥じらう顔を見たいんだよ。」

「まあ…。」

要は自分をいじりたいのだ。相手を困らせて喜ぶのはヘンタイ。サディズムという立派な

病名もついているし、結構ふつうに居る。全裸の姿をマスコミに出したマヤも性器まではまだ公開していない（ことになっている）のだ。あまりじらしてもしらせるので、マヤはその場にぺたんこ座り込んでみじもじしながら股を開いていった。結局最後には大きくw字開脚させられ、股間をすっかり見せてしまう。

「うん、マヤのまんこは意外にきれいだな。桃色でくろずんでもないし、毎日酷使する割りに花びらもよれてはいない。いいよ、いいなあ。」

こんなことに堂々言及する客は余り居ない。もちろんマヤたちはどこであれ見られることに慣れてはいるけれど、同僚にはことさらに見せるなどと強いられたら怒り出すプライドの高い女もいるし、マヤも出会って数分の初見の客にここまで要求されることはなかった。呆れたといった風情で、W字の姿のままマヤは片手で股間を隠し、また訊いた。

「で、分かったの？言ってみて？やまさん。」

「うん、そうだなあ、ちょっと熟れて疲れた感じがあるし…、まあ今日は五人ってえところだろうかな。」

素直なマヤは何事にもフェアで、当為即妙にごまかす、あるいは嘘をつけて否定することができなかった。一瞬投げたような表情で正解と認めたも同然だった。いつものマヤのペースなら今の時間は2時間の休憩を挟んだ五人目の客になるはずだったけれど、今日はちよつと違って午後7時からの休憩時にマネージャーの頼みで五人目の客を入れていた。つまり、店のことをある程度知っていたら彼女が正午から今の時間まで休みなく働いているという前提ではじき出せる簡単なクイズではあったのだけれど、マヤにしてみればいつもにたくオーバーワークになっているという意識下の疲労というか不満のようなものをやまさんに具体的に察知された（とも思える）ことがちよつとショック。予約指名の多いマヤはそんな日は休憩は返上することも多い、今夜のように。

「おれで六本目ってことか。ま、よくやるよな、可愛い顔してさ。」

「ふん、（どうせ事務所でマネージャーさんから聞きだしたんでしょう。）意地悪ねえ、やまさんは。」

でもマネージャーさんが客に聞かれてそんなことバラすだろうか。当てたらご褒美なんていう、損した。

「反論しねえところをみりや、凶星だろう、どうでえ。」

当てられたマヤにとってはいい気分ではない。もっと少な目の人数が出てくるかと思っただけだ。五人が、六人になったからといって、だからどうなんだわさー。私が娼婦だということとはまぎれもないんだし。いいわけをするつもりもないマヤは多少開き直りの気分にもなる。

私が同僚たちに比べて働きすぎなのは本当だ。休憩返上っていうのも私は特に抵抗はないので大抵引き受けるけれど、同僚は断ることが多いからマネージャーは私に先に訊きに來る。まあ一番人気の私が代打なら客を逃がすことはないわけだし。これからも休み時間を



挟んで午前二時まででしつかり更に2人の予約をこなさねばならないのが私の日常だった。

「たしかに私、売れっ子だけどね。」

ソープ嬢仲間にとっては勲章かもしれないけれど、しゃばの素人連にはどう映るのか。マヤが常住しているこの快樂天国、別世界から一転常識の下界に戻れば、これを公衆便所などと揶揄し嘲り、なぜか最低の職業だと鼻をつまむ人間もいるし、客にだってその種の人間が少なくないことを彼女自身も経験から承知している。やまさんもそんな人間だったとは思いたくもないけれど、とりあえずはもつと重要なことも下界にはある。このひと、税務署の調査員かしら、気をつけないと。

マヤのしらけた表情を見てさすがにやまさんも乗りすぎだったことで反省したらしい。

「気を悪くしたんだっただごめん。俺としてはそんなマヤに催すんだ。いくら褒めても褒めたりないくらいなんだ。そんなきれいな顔ときれいな身体で一日中、何人も男をとつかえひつかえして満足させているすごいマヤのことをな。」

「やすみなくお客さんと寝てすごいとかいって、褒めてくれるけど、褒めるところなの？ いんらんの鉄マンとか言ったお客さんが居たけれど。」

「マヤはセクシーですごい、すごい魅力の美女だよ。それが悪いはずないじゃないか。」  
すごいって、何？立派だとか、素晴らしいとかいって賞める、そういった晴れやかな言葉とはちよつと違う感じがするけれど。それで、ずっと気になっていた最初の会話のことを聞いてみる。

「ねえ、やまさん、最初に挨拶のときの笑顔がどうか言ってたでしょ？」

さりげなく言ったら、またやまさんが済まなさそうな表情をした。

「ごめんよ、俺はひねくれてるから、女の笑い顔が好きになれないんだ。大抵、どんな綺麗な子でも笑い顔はなにかむなしくてどうも綺麗じゃあない。いや、俺がそう思っているだけかもしれないけど。ともかく、マヤの笑顔は綺麗だったよ。それだけ。」

ふーん。マヤは、なら、普通の女性はどんなときの顔が綺麗なの？やまさんには、と聞くと思っただけれど、やめにした。

男の本心が分からなかったけれど、いつもの多くの客のように、休みなく日に7人から八人もの男たちから次々に抱きまわされ突きまくられて「劣情のドレイン（滓かす）」を吸い取り紙よろしく身内に受け入れて、心身疲れ気味の下級娼婦である私の、しかも心を更に傷つけて疲れさせる、そんな男の一人なのかとも思い、しかし彼のいいぶんはそんなストレートな軽蔑とは異なるらしい、それだけはマヤにも分った。そう思ったかった。

ともかくいろんなヘンタイ人間もここには来るので、私は私の役目をつとめるだけだ。そうおもってマヤはやまさんを許そうと思った。でもそのときに感じたわけの分からない不安が、あとで現実になるのを彼女はさすがに予想できなかった。いや、予想していたのか、なんとなく。

気分を変えようというのか、やまさんはしきりにマヤを湯舟に誘う。

「入れよ、マヤ、一緒に浸かろう。なあ、あれ、やってくれよお。」

仕方ないわね。ここでは省略することもあるんだけど、知ったひとつにはこの定番「潜望鏡」はごまかせない。この男、ソープのことよく研究しているよ。マヤは一度かかり湯をして、男の正面から湯船に入った。長いつくりもののような素足が左、右と男の顔の前に伸びて浸かり、しおらしく湯の中に沈んでいく。薄めの恥毛はもちろん、その下の股間の桃色の肉襞のなまなましい景観も再び男の鋭い視線にさらされる。今度はやまさんもそれを批評しなかった。ファッションモデル並みにすっきり痩せた、しかもセクシーな48キロのマヤの肉体分の湯がざーっとあふれ、ともかく毛深い男の両足の間へ下半身を割りこませ、全身を湯の中に沈めて再び男と向き合う。今は痩せた両肩とまっしろい2つの乳房の幻像が周囲の湯面へ広がった茶髪の間からたゆたうように浮かぶ。

「ああ、いい眺めだったけど、隠れちゃった。残念だなあ。」

「あとで、嫌になるほどみせてあげるわ、なにかも、目の前、鼻先でね。」

湯の中で大きくなった男のものをさぐり掴んだマヤはたまのうしろも適当にいじりながら尻の下に手足を入れて男の腰を浮かせ、湯面に垂直に立ちあがったそれを片手に握りなおし、首を伸ばしてくわえ込んだ。濡れた髪の手で越しに上目づかいで男を嬉し目に見つめながら、彼女自身愉しむように舐めまわし、甘噛みし、しごいたり横くわえにしたり、結構動きもきびきびして激しい。もっともそれだけで男をいかせることはない。浮力の助けはあるものの、男の姿勢が不自然で集中できないこともあるだろう。何度か深くのどちんこに当たるまで呑み甘噛みでしごいたあと、唾液でずるずるになったものを口から糸を引きつつ出し、マヤは微笑しながら聞いた。

「ねえ、ここで出す？それとも、我慢する？」

ずっと貯金しておいて最後にどばっと華々しく自爆する型と、その都度オーガズムを味わいたいという浪費型のひととが居る。やまさんは後者のようだ。出す、出すと駄々をこねるようなやまさんに応えて、マヤはいったん伸びあがって桃色の軀を下腹部まで湯から現し、男の面前で自分のうちにあっさり深く収めていった。たっぷりした唾液がなかなかいい感触を保つと抵抗少ない挿入感を演出する。そのまま湯船に沈むせつなに男の左手が女の細腰を捉えて、落ち着いた時には、より深く根っこまで接合したままで自分の腿の上にマヤの尻を乗せたようになっていた。女の両腿が男の胴を挟むかたちになり、湯の上に出たマヤの尖った乳房が男の毛深い胸に触れたのは、女の抵抗に逆らって男の両腕が女の背中に回って強く抱き寄せたからだ。当然顔も触れ合わんばかりに近接した。

「あら、…。」

こんなときいつもはお互い見つめあいつつも多少の距離を保ってその結合感をじっくり愉しむのだけれど、男の積極的な行為にリードする方のマヤが逆にたじたじといった状況だ。男は当然のように正面の女の唇を襲い、強く吸った。マヤも覚悟を決めて応じる。突っ込んでくる舌に絡め、逆に相手の方へも押し込んでいく。もちろん下の方の応酬も熾烈だった。湯が沸き返るほどに動き動かされる。湯舟で男にこのようにされるのはマヤにも初め

てのことだったし、息詰めの苦しきともあいまってよほどのことでなければコントロールできるマヤの性感が久しぶりに高められて危うくなったほどだった。なにせ湯の中のファックは体温もあがりともかく疲れるのだ。しかも強く密着された胸の乳房二つも激しく揉み潰されてキスのままでは息づかいも苦しい。うう、最初からこの調子では、あとが思いやられるわ。

2分近い激しい水中ファック、ピストン運動を継続しつつ男はまだ絶頂の直前で、オーガズムへの崩落をしのぎ耐えつづけている。胸の密着が緩み男の攻勢がやや弱まったのをしおにマヤは抱擁から逃れ、下唇の絞り込みだけは続けながら訊いた。

「ねえ、本当に出す？」

「中途半端じゃねえか。湯の中じゃあ心臓に悪いっていいいたいのか。」

「いえ、そうじゃなく、ご褒美のこと…。」

「…?…」

「第二ラウンド、スペシャルサーブイスよ。」

優しく相手を握って抜くと、そのままマヤは脚を折りまげ身体を湯の中で旋廻していった。男に背を向けたあたりで足を底につけて腰をあげる。長円形に横へ強くふりつと張ったマヤの尻がやまさんの面前に浮き上がる。その中央鞍部にすっかりあらわになった小さな孔と性器が男を強く挑発する。自らは湯舟のへりへ身を任せながら振り返り恥らうような視線を男の方へ向けて、右手に握ったままの男の脈動する凶器を湯上りした直後の濡れた器官へ擦り付ける。左手は同時にその中心のきりと締まった大陰唇のあわいからその上の菊の座を自ら強くいじりなぶりまわし、特に肛門への指の入れ込みが二本から三本と激しくなっていく。自慰ではなく準備行動だ。

「どちらでも、お好きに…。」

こうまで誘引されて発奮しない男が居るだろうか。やまさんたまらずがばと湯から身を起こして眼前の細身の太ももを大きな両手のひらで確保する。焦りつつも臆するようなアナル挿入を最初はゆっくりと、しかし次第に強く激しく根元まで没入させてマヤへの最初の鶏姦をなしとげ、数分間の激しいラッシュのうちに思ったよりも早く中出しまで遂げてしまった。

こころもちのけぞって男の視線を避けつつ動かされるマヤの絞め込み、緊張を保持して耐え背の君をたのもしげに流し見る横顔の表情がやまさんにはたまらずよかったのだろう。男の息も荒かったけれど、防戦一方だったマヤも、正直な息の乱れを押さえきれない。抽送が終わったあともなお抜かれないまま半身を起こしたマヤはすぐその動きを支えるように長い腕を伸ばしてぐりと乳房をつかんだ敵にひきつけられ抱きつかれ、首をねじられて唇を奪われた。よく後ろに張った尻が妨げにはなったものの、マヤ自身のしなやかな身体が可能にする不自然ながらも強い一体感のある、上下で密着交合した姿のままでの抱擁はしばらくは凍結したように解かれなかったのだ。

離れた直後も姿形をそのまましばらく口開いたアナルの凄愴な景観をゆっくり男に楽しま

せる、その間もおざなりでなく微笑みを返し、男がまた湯舟でくつろぐうちにも疲れを見せずマヤはほどなく塞がった孔から漏れ出る精液をそのままに気にも留めず先に湯から出て椅子洗いのメニューに移行するべく準備にかかる。

「ご褒美、満足されて？」

「マヤがあんない道具をもっているたあ知らなかったな。でも良かったろう、おまえも？ いっちゃいそうだったろう？ でもいかんかったなあ、あのラッシュで。さすがだな。」

「やまさん、お上手だったわ。私、正直びっくりした。お風呂でこんなこと、初めてだわ。」あの苛烈な動きに怯じず、しっかり機能を維持した自分の肛門の機能の強さを少しは褒めてもらったことがマヤには嬉しかった。

90分のメニューは最大3回抜きが普通のサービスで、椅子洗いとマット洗い、いわゆる泡踊り、それに余力があれば最後のベッドインでも応接する。風呂は途中の休憩か前技に終始するのがほとんどだ。男の回復力にもよるけれど、そのすべてでオーガズムを楽しむ強い男は少数で、多くは途中をラッシュだけで中止めに我慢し、成り行きで放出するのが多い。でも、このひと強そうだし、ひよっとしたら4回すべてで抜く積もりじゃあないかしら。大体、キス自体がルール違反なのだし。

「だから、ありえないご褒美ふたつ、なのよ。」

「いいじゃあないか。『タブー』なんだろう？ おまえさんだってまんざらじゃあないんだろう。」

ふふ、と笑いでごまかしてしまっただけれど、心の中は複雑だ。まんざらじゃあなかったんだらうって、どういうこと？ アナル提供で私の対応が余りに親切すぎて、キスも本当に気持ちよくやっているように見えたのかしら。うーん、相手に自信を持たせすぎるのは、これは考え物だ。ともかく今日のように奇襲をかけられない限り接吻はお断り申し上げている、というかそういうシチュエーションを注意深く避けている、というか、わかってくれそうなお客さんには「これはご法度なの、ソープではね。」といって割り切ることにしている。でも向こうからどうしてもというこだわりがつかないかた、強引なひとは強いて断らない、というか雰囲気が悪くなる場合があるからこちらで折れて、できるだけ入れ込まないような事務的な雰囲気です、してあげる、というかさせてあげる。

この風習は商売女も心までは売らないという江戸時代からの娼婦の掟、プライドから生じた節度なのだろう。セックスを商売にするにあたって、お互いの非武装分離地帯を設けたということだろうか。女にとっては特に、ただでさえ身体と心が引き裂けるような商売である。接吻はなかでもおたがいの心が一番近づく行為のだけれど欲情そのものはそれでは収まらずにむしろ不満が高まる。身体だけの行為だ、ビジネスなんだと割り切るためにはこれを禁止するのが手っ取り早い。もっとも、ぎりぎり何だって貪りたい欲張りなお客さんにしてみれば、理不尽だ、というのは無理もない。バーチャル愛とはいっても身体を任せる相手にキスだけはさせないというのは分かりにくいルールだ。フェラや尻舐めまでや

つてのける女がどうしてキスにこだわるのかといわれても困るけれど、愛し合う男女がキスをしてセックスまではしない、できないという世間の風習を裏返せば、普段永続愛を想定できない娼婦にはこのセックスの代用品は、お互いに生々しすぎる、後にトラブルを起こしかねない困った行為なのだ。

風呂でむさぼった分、案の定椅子洗いでは男は回復がおぼつかなかった。横ずわりでフェラも振舞ったし、背向位で再び肛門へも誘って男を驚かせたけれど、堅くなる気配はあっても、本格的行為にはならなかった。しかし、マット洗いでは再びびんびんに活発になった。うつぶせにして背中にも重なり、ボディ洗いをする間も、痛い、痛いよ、早く裏返りたんだよ、と訴える。男のちんぼがマットにつつかかって堅くて曲がりかね、耐えられないのだ。本当に、男って不便なものね。

マヤは女としては大柄な方だけど、痩せていて体重がみかけほどないし、なにより身体能力が高いので動きに無駄がなく、お客さんに負担をさほどかけずに男の背中に重なって致すパイプなりやらブラッシング（恥毛でのそれ）などが上手で絶品といわれるほどだ。その得意わざをもっと味わわせたかったけれど、仕方がない、男をおおのけに反転させて、腹へ貼り付かんばかりに反りがあがっているものを適当にあしらいつつ、ふたたび男の胸やら腹の上を全身で摺りつつ這いまわり、同じようなボディ洗いを続ける。普通のソープ嬢がしつかりこだわってアップにセットして濡らせないままの髪が、マヤの場合は濡れそぼって顔に乱れかかり覆われたり揺れ動いたり床に広がったりして、ワイルドとも凄艶ともいえるビジュアルを演出するのもマヤの売りなのだけれど、覆いかぶさってのボディ洗いではこの長い髪が邪魔になってなかなか面倒になるので、大抵は背中に貼り付けることになり。相変わらず男は腰を抱きとめにかかったり、眼前に迫ったよく張った乳房を指でつついたりしてマヤを困らす。ぐるりと反転して彼女がシックス・ナインの体形で同じことを始めると、そのいたずらが陰核陰裂や先刻の激しいアナルファックの名残りをまったく留めていない尻の孔へも及ぶ。

壊されない限りマヤはここではもう何をされたって平気になっているけれど、やまさんに手指を突っ込まれているらなぶられはじめるとその荒々しさにさすがに穏やかではいられない。いや、高められるということではなく、不愉快に近い気分。だからお返しに男のものを強く握ったり、噛んだり、更に敵の肛門へも舌や鼻先を突っ込んでぐりぐりいじめたりもしてやる。

我慢しきれなくなったらしい男の要請もあって、マヤは背面騎乗位で男のものの根っこを握り、男の視線を背後に意識しながらゆっくりと入れ込んでいった。まさしく鮮烈な交合の状況をまじかで見ると男の動きが急に激しくなる。余り動かれるとマヤも困るので、足腰のばねを使いつつ精一杯得意の絞めと圧搾を繰り返して動きを封じる。もちろん男のたけりたかぶる力と動きを押さえることは出来ない。上半身を立たせたマヤが繋がったままぐるりと身を回転させて男に前面を見せ、男の上下の激しい動きに懸命に同調し、応えて脚の

ばねを小刻みに効かすと、もう耐えられなくなった男の二度目の抽出が始まった。存分に中出しをさせてやり、男の息遣いが戻るまでマヤは密着したまま余韻をながびかせてやる。69に戻って、竿の中のを残らず吸い出し、舐めてやり、ぐったりした体の男を優しくバスタブへ導く。湯舟の中で再び向き合って抱き合い密着する。男が自分のスペルマの臭いに満ちたマヤの口を吸う。相手の体液をつけたまま、仕込まれたままマヤは彼の居る間を過ごすのはいつものことだけれど、キスを交わすことがこの男の場合、癖になってしまった。マヤもプロだし情感にながされてばかりはいない。キスやグリップを強く身体のあちこちにされたらあざが残ってこれはあとの商売に困るけれど、やまさんはそこは心得ているようだし、こんな親密感に許しておこう。抱き合い濡れそぼった髪を男の首に巻いて一体になっている。

やまさんはよもやま話のようにして最初に五人の数を当てた種明かしを問わず語り話した。最近この店に来てマヤのキャンセル待ちをして結局諦めた、そのときにあてがわれたソープ嬢から、マヤの時には休憩もとらずに客をとる繁盛ぶりを聞いたという。マヤに決して好意をもってはいないのがよくわかる話しぶりだったようで、聞いた内容そのままではなく、簡単にはしよっていた。言ったのは美人だから当面人気だけれど、心が通わないといずれ飽かれる世界だとか、美人は不感症なのでマヤのサーヴィスがおさなりになり、そのためにあれだけの人数がこなせるので、そうでなければどうしても客に合わせて入れ込んでしまい疲労が込んで、いずれ身体を壊すのがおちだとか言っていた。ま、これだけ言えば十分だろう。彼女はここではマヤと変わらない勤続年数だけれど、あちこち動いて10年近いベテランだった。

「なあ、おまえだって若い女だろう。俺自身はそうは思わないけれど、ビジネスと割り切ったところでこんなに毎日めっちゃめっちゃまぐわって、刺激されてなんともないはずはないだろう。変な気になること、あるだろ？あるよ、絶対。さっきもそうだったろうって言わせるつもりはないけれど。それとも毎日毎度のことと、不感症になっちまってるのかな。」  
「あら、失礼ね(ま、本音で悩みはそんなところなんだけど)。私たちだって当然性感はあるし、本意気になることだってありますよ。素っ裸で異性と向き合っている時間の緊張と刺激で日常がどきどき感ばっかり。最初の頃は興奮することが嫌な感じ(罪の気分)もあつたけど、今じゃあそれも素直に愉しんではいるけどね。当然でしょ。どんなお客さんでも大抵の場合快感はあるし楽しんでやっているわ。もつともたまに乗りすぎて、うう、いくかも、と思っても、おもてなしの方で先に気をやってしまうわけにはいかない。プロなんだし、辛いけれど我慢することは事実。我慢が日常になると不感症になるというひとがいるから、その不安を吹っ切るためにも、よほどのなじみのお客だったらよし、これでいっちまおうって自制をはずすこともある(ま、仕事の終わり近く、珍しく好みのいい男という条件があるけど)。私たちもやっぱ若い女なんだし、好みだってある。大体から、毎回お客に合わせて本意気で絶頂を味わっていたりしたら体がもたないわ。疲れるのよ、あれ。やま

さんのようにてだれのひとは、やっぱりおぎなりでは気分わるくするようだし。そこはサーヴィス業だから気を遣る、いえ気を使って演技でカバーするんだけど、この種の演技って私自身本意かどうか分からなくなってしまったことがあるので、むづかしいのよね。

「ふふふ、少なくとも不感症じゃあないわ。さっきだってあぶなかった…。」

「もうひといきだったんだな。でも、ここでいくことあるのかい？しつこいけど。」

「いかせて見る？ベッドで。」

「おれはもう、だめだ。もちろんベッドでやるけど、おまえ、結構我慢強いようだし、風呂とマットでだめだったようだから、3度目はもう自信ないよ。」

確かに、四〇男で九〇分間に3度出しはそれ自体きついはずだし、最後のベッドでの正常位はお互いさほど燃えることなく終わってしまった。もちろんプロを自認するマヤは彼女自慢のしなやかな細身を極限近く開き、反り、ひねり曲げたりしてさまざまセクシャルな痴態姿形を見せつけ、四十八手の体位中でもなかなか普段は出来ない気恥かしいポーズまで見せて男の気を誘った。その結果としてともかく3度目の射精を実現させたことではあったけれど。

「でも、これだけ毎回男のものを受け入れて、おまえ避妊はどうしてんだ。まさか手術してしまったわけでもないだろうし。」

「ふふ、私もまだ若い女性だし、月のものはあるのよ。でもご安心なさって。たまたまできたってやまさんのこどもかどうか私にも分からないし。」

ま、今日び、証明はできるらしいけど、よほどのことでない限り静かに墮ろすことになるでしょ。

九十分の間にマヤはやまさんが想像していた以上の濃いサービスで献身的な働きを見せて満足させたことだった。お別れはしっとりした髪のまま最初対面したアラビア娘の姿に戻ってロビーまで見送りに出た。

それで、別れ際にやまさんはこんな頼みごとを言った。

「なあ、マヤ、おまえをリラックスさせてとことんいかせてやりたいんだ。おまえさえ良ければ、こんな遊びをやってみないか。タブー破りのマヤを見込んでいうんだけど。」

男の提案とは、トリプルでダブルをやりたい、というものだった。普通、ダブルとは九〇分の倍、一八〇分間マヤとさしでやりあって愉しむということだ。トリプルは更に長く、二七〇分、四時間半マヤを独占するということになるのだけど、このトリプルが男のリスクエストでは、実は客の数だった。つまり好きもの男3人で3時間マヤひとりを味わい尽くしたい、という。サービス料として3人分払うから、時間にすればそっちも得じゃあないか、店も合わせて三方一両の得、とやまさんは言う。本当かなあ。

普通、カップルでなければ男ひとりに女性数人、俗に2輪車（女2人）とかマンジ（3人以上）とかいうのがソープの常識だ。お大尽の客である男ひとりととことん満足させるための天国装置だ。それを、客の男3人でとことん“ソープ嬢ひとりを満足させ尽くす”と

いう。こんなプレイをマヤは職場で聞いた事はなかった。

大体からソープ嬢を満足させるものはいちにお金なので、セックスで満足させるのは筋違いだ。わたしたちは毎日ゲップが出るほど男を味わっているので、そういわれても本音として迷惑至極というところ。そもそも真の性的満足を客に与えなければならぬ私たちが逆に彼らから得るのは間違ったさかさま世界だ。ここで私たちはむしろ自分たちの快楽を極小にして（無駄な疲労を避け）、男たちを最大限満足させるためのテクニクを磨くことを旨としている。でもわたしたちはお金を貰っている立場上、男たちのためにあるんだから彼らの性的な満足だけではないトータルな満足感、たとえばバーチャルではあっても彼らから見ても隷従しているという優越感を持たせることが重要だ。お客さんの中にはそういった気分を濃厚に臭わせるひともいる。私自身はあまりいじられた経験はないけれど、同僚の中にはお金を投げつけられたり、「おまえ、娼婦だろ、金を貰ってんだから、文句言わずに言うとおりにさせろって」とか自分相手のペースで無理なことを要求するひともいるらしい。（もつとも、逆に踏みつけられて悦んだりとかいう倒錯というセックスの形態もあるけれど。）そういうことを思うと今度のやまさんの要求の下心が見えてこないこともない。お客さんの満足感を損なうことが許されない娼婦という立場であるわたしにリラクセスさせてとことん満足させてくれるということは、わたしにお客さんを信頼し、身も心も任せきりなさいということだろうけれど、いつもたてまえとしてわたしたちがやっていることで、ふつう一人だけの主人に隷従して性的満足を与えることだ。大抵は私たちの身体（だけ）を好きにさせるということで彼らは満足するわけだけれど、やまさんぐらいになればそれだけでは満足せず、わたしたちが本意気で絶頂に達するのを見たい。それが三人の主人のまえで身も心も捧げ乱れつくしてしどけない姿をさらけだし、彼らに徹底した優越感、勝利感を持たせて満足させるということになるのだろうか。やまさんがそういうったゲームを仕掛けてきたということ？

マヤは最近の過激なAVでのやりプレイを知らないわけではない。ギャングバンとかいう、ネットで外国のポルノにあったものを思い出した。ひとりの女に3人のむくつけき敵方が群がり同時に複数の穴を攻めまくるという過激な場面もあったけれど、形としては俗に世に言う輪姦というようなものであり、不埒な反倫理的状況、常識社会では女性の人権を蹂躪する犯罪であり非道な暴力行為を、しかも当の女性が了解し参加することがどんな意味を持つのか。

彼らの建前として男好きセックス好きニンフォマニアの女の天国、女冥利に尽きるということだろうけれど、やっぱり男の欲情のほとばしるまま勝手になされるまま手荒な扱いを悦んで受ける女はつまりそれだけの普通でない異常な性欲を持っていることになるし、同時に一体となって複数の男を愉しませるには彼女自身よほどの体力とテクニクが必要だろう。そんな中で娼婦として女のプライドを保つには男を受け入れても基本は醒めたまま相手の行為とオーガズムを見守るのが本来だろう。

元来サデイスチックな傾向がある男たちだし、あんなことにヴァーチャルであこがれても



おかしくはないのだろうけれど。もちろん気骨あるプロの娼婦として、マヤは客の男たちが満足してくれるのなら要求することはなんだってやらねばならないだろうし、やってもいいと思っっている。大体、セックスというものはそういう狂気に近いものだし、向こうが払う代価に値する犠牲をマヤは全身で受け止め、体現するべきだと思う。

そんなことを本意気で思う私はなぜかどうも自覚しないままマゾっぽくなってきたのかも知らない。たくましい男たちに身も心も捧げてめちやくちやになってしまいたいという悲劇のヒロイン。そんなことを多少は快感にも思いつつ、正直なんとなく気が進まなかったけれど、やまさんの真剣さに加えて、実入りもあるわけだし、ナンバーワンのプライドもあり、気丈にかっこうつけて、さあ、どうだか、お店が許したらやってもいいわ、くらいにマヤは答えておいた。

こんな仕事を続けていたら、いろんなお客に出会うのは確かだ。男の話しで思い出したけれど、あたしと対等以上にやりあい、ともかくへとへとにさせようというような魂胆から自分で愉しむという域を越えて積極的に頑張る男もいる。こよなく正常位が好きで、1時間以上入れっぱなし、抱かれっぱなしで攻め続ける強壮な客もいた。私もプロの意地から頑張ったけれど相手を陥落させることは出来ず、ほとんどの時間、快感を越えて痛いばかりだった。

そういった粘液質の客の多くは同僚にも嫌われていて、新入りだったころはマヤに回されるが多かった。そういった客が今、マヤの常連になっているのはよかったのか、そうでもないのか。ま、いずれあれほどの客を応接できるのはここではあたくらいのものだろう。今度の話しだって、ほかの女の子にはとてもつとまらないはずだ。はなから断られるだろう。

実のところ、マヤは売れっ子だったこともありここでマネジャーには住居などで特権を与えられていたけれど、5人居るここの古株の同僚からは当然よくは思われていない(あとの2人はマヤの後に入ってきて続けているマヤの信奉者)。美人でけちのつけようがない容姿健康な肉体、性格もいいとなると自分のお得意を奪われてもしかたがない、成績がトップで毎月大入り袋をもっていかれてもあきらめるしかない。大入り袋が固定されてしまったので廃止されてしまったのはおもてむきマヤの自主返上だけれど、彼女たち抵抗勢力の不満かげ口があったことは間違いない。

それにマヤのトップ独走は彼女たちのオウンゴールも多分に指摘されている。つまり初期の嫌な客の大量押し付け、それと店の広告塔にマヤを採用する(大方の女は顔出しをやりたがらないので既成のAV女優などを頼んでいた。マヤが思いのほか躊躇なく顔出しを承諾したことで“整形”が噂になったけれど、それもいつのまにかしぼんでしまった。もつとも噂はずっと底流にはある。マヤは果たして整形美女なのか、少なくともあのDカップの乳房は怪しいがどうか?とかを半ば嫌がらせでマネジャーに進言したことなどだ。マヤはそれらのハードルをクリアーして自分の実績とここでの確固たる地位を積み上げていった

わけだった。大体からマヤが2年間もここに居座るなどと予想したものはいなかったし、古株の女たちの、美女はソープでは大成しない、それだけで人気はとれない、あるいは逆に酷使されてすぐ潰れてしまうだろうというような批判勢力の期待と思ひ込みがいまのところマヤには通用していないということのだけだ。

ひよっとして、やまさんなる男はこのイベントの瀬踏みのために来たのかしらとマヤは思った。日にマヤが何人の客を取っているかなどのデータを知りたかったのもそのためだろうか。その話は後日当人の知らないうちになぜか店長までいつており、普段の日はマヤに負担がかかりすぎるので、公休日に彼女の自己責任（店もちゃっかり上前を取るんだ）においてやってほしいという話も出たけれど、それなら逆にイベント自体で時間制限がルーズになるし、彼らの費用負担も多くなる（マヤの店外デートは一人で一律20万までだった！）。結局最初の提案内容で店長はOKしたのだった。純ナマ、ディープレックス、アナルファックに続けて、マヤに4つめのタブーが加わることになった。

大体、お断りすること頻繁なほど繁盛しているマヤは、ひとり数人分の時間を独占するダブル希望の客は原則お断り申し上げている。マヤ自身としてはファックの回数も少なくなる（90分で3回致す客でも、180分で6回放出出来るはずはないよ）し、楽なだけけれど、あとに繋げるファンの拡大を考えると、出来るだけ多くの客に機会を持つていただく方を選ぶことにしている。マヤにはおなじみのお得意客も多かったけれど、広告を見てくる一見さんも結構いるのだ。そんなお客は希望によってはその場で予約のキャンセル待ちをしてもらう時もある。お客の数をこなすということでは、今度の、客からの逆マンジの提案はまことに効率もいい（2人分の時間で3人をこなせる）ことには違いなかったし、店が乗り気になったのも当然かもしれない。ここ2年以上、正月もお盆もなく、休日だって店外デートで稼ぐなど金のために働きづめで稼いでいるマヤにも悪くないことかもしれない。

もつとも、今度のことは、純ナマをはじめ危険も顧みずなんだってするというマヤにも初めての経験であり、不安がないといえば嘘になる。逆マンジは確かに時間割でお客様の数をこなす面ではいいのだけれど、普段のマヤのペースに持ち込まず、群集心理にかられたお客さんにいいようにされる可能性があったし、3時間で最大9回抜き（3人×3回！）を強いられる可能性もあった。多分、同時二穴とか三穴とか言うことになるのかもしれないけれど、それで完頂できるものだろうか。マヤにも想像を超える世界だった。同僚の間でも話題になっているようで、中では気の合った何人かはマヤの勇気をたたえたり、元気付けたりしてくれる。もつともそうでもない、いつものように無視したり、マヤの超ニンフオマニアが証明された、どれだけ儲ければ気が済むんだいとかあてつけをいったりするのも居たけれど、どだいマヤほど指名客が多くない彼女たちには無縁なお話だった。

マヤがどんな結果を出してくれるのか、これがうまくいったらいまはおこぼれで潤って

るマヤのご指名キャンセル時間待ち流れ客がそれでこなされてしまい、いまですら差が大きい売り上げが更に差をつけられてしまうことにもなりかねない。だからみんなが自分に利害関係が及ぶ範囲で関心をもっているのだろう。同じビルに自分の住まいがあるマヤは、多くの場合待機ルームからでなく、自宅で連絡を待って直接お客さんを出迎えることも多く、同僚たちと顔を合わせる機会がすくないのだ。

いずれにせよマヤにも最初の経験で負担が大きいだらうと、結局このお仕事は、次の日に障らない休み前日の終了前が当てられることになった。さあ、アイアンマンコ嬢・マヤはこれを取り切ることができるのか。

あの日からひと月後の深夜十一時ぴったり、店じまいまでちょうど3時間を残してマヤが迎え入れた3人の客は、先月この話しを持ってきた「やまさん」当人と、その友人だという2人だった。それぞれ見た目紳士といえなくもない同年輩40がらみの中年で、既に禿げ上がっているがんさん（最年長というのでもないらしい）、残りの男はりょうさんといった。強いて彼らの共通点をあげるとすれば背格好、体格が中肉中背で皆陽性、マヤに強い興味を持ったようだった。みんな脂ぎったお顔で、好色を絵に描いたよう。セックスも当然強そう。気になったのは、皆ちよつときこしめしておられるらしく、ぶん、と酒の臭いがした。この時間、当然かもしれないけれど。いつもの個室でなく、従業員サービスのための広い浴室へ彼らを送り込みながら、マヤにふつふつと闘争心が湧いた。

「なんだ、ここはいつもの部屋じゃあないんだな。」

ちよつと不服そうに言った幹事役の男、このイベントを企画したやまさんにはこの明るい、健康的な雰囲気は物足りないのだろう。

「あそこは、お三方同時には狭いし、お風呂もひとり分しかないから……。ここは湯船も広いし十分ゆつたりされますわ。今夜はここ、貸切りなのよ。」

なるほど開け放った脱衣場から見えるピンクのタイル貼りの湯船は縁が低くて、風呂場のスペースの半分近くあり、4人で身を伸ばし首まで浸っても足がちよつと重なるほどで、中で全員が戯れる余裕は十分あった。洗い場に既に3人分の「椅子」とエア・マットが立てかけてあり、脱衣場にはダブルのマッサージ台が運び込まれている。個室と違うのは鍵がかからないこと、その反面ここには事務所と連絡できる電話がない。いざというときは大声でさげぶしかない。入り口に「営業中」とにわか作りの札を下げておく。

「さあ、早くお脱ぎになって。お風呂でくつろいでくださいな。」

マヤはいつものオリエンタルの衣裳のまま、皆はまだネクタイも解かず、身近かのマヤの肌もあらわなこの店の制服姿に無遠慮な視線を向けたまま、無表情に近い。彼女のひとことやややだらだらとロッカーに向かい、脱衣かごを出してそこへ衣服を投げ込むものもある。3人分のロッカーを確保してあったので、マヤはその扉をみな開けて、まず、かごに入った衣類のお世話を始めたのだが、それがやまさんのものだった。背広を取り出し、ハンガーへ通そうとする。

「あ、そうそう、金、かね。」

幹事役のやまさんがマヤからその背広をひったくるように取って、紙入れから万札を数え出してきた。ちょうど4万5千円。少しは色がつくかと思っていたマヤだけど、もちろん不服のあるはずはない。あつ、でも、マヤのいつもの習慣で、手ぶらで個室から出てきたままだ。ここは物入れのあるホームでなく、勝手が違った。空のロッカーに現金を投げ込んでいくわけにも行かない。ポシエットだけでも持ってくれば良かった。ありがとう、と押し頂いてちよつと考え、ブラジャアに無造作に押し込んだ。それをきっかけにして皆の固かった雰囲気緩和されたようだった。いや、和らいだということでもなかったけれど、ともかく口が軽くなった。

「ひひ、ストリップパーのお祝儀みたに、からだにつけちまったぜ。」

「ねえちゃん、いや、マヤさんだったか。あんたも脱ぐんだろ、もちろん。早く脱ごうや。」

「なんなら脱がせてやろうか、ひひ。」

「金、その辺にばら撒かないようにな。あんたの感覚では、はした金かもしらんが。」

マヤは彼らの不快感の原因がわかった。

「あら、ごめんなさい。失礼だったわね。こんなことして。失礼ついでに、ちよつと…。あそうそう、おタバコとか、お酒、持ってこさせようかしら？」

ともかく私は今夜はどうかしている。ここに電話がないことに今気が付いた。

いずれポシエットも要る。金を自室のロッカーへしまいにっこうと出口へ向かう。振り返って、皆の目つきが陰しくなったことに気づいた。

「おいおい、どこへいくんだい。」

「何もいらぬよ。あんたのからだだけあつたらいいの。」

「そうそう。ま、おまんこだけっていうのも、ちよつと困るんだけどね。」

下卑た笑いが混じった。酔っているのだ。もつとも、こんな雰囲気もマヤには戸惑うほどではない。もつと荒れ気味の気難しい客をあしらったこともマヤは数え切れない。一時はそんな客専門だった。でも皆なぜか私には優しかった。ここで三人に絡まれることは初体験だ。幸い幹事のやまさんは幾分冷静だったようすだ。

「おいおい、セクハラになるよ、ガンさん。タバコ、いるんだろ、りょうさんも。いかせてやれよ。あせるこたねえ。まだ、たつぷり時間はあるんだ。」

セクハラ、という言葉で爆笑が入った。

「おいおい、セクハラって何だ。まっパダカになって誰彼なく気儘にセックスさせる女にどんなセクハラをする？」

「まあ強いて言えばそういういいかたがセクハラになるんだろうよ。」

冷静なやまさんの言葉に救われたかたちのマヤはすねることも出来ず、

「そうね、確かに。ふふ…。」

とぼけて笑うしかない。なかなか面白い切り口だと思つたし、いいたいこともあつたけれど、ともかく自分のうっかりさを恥しながらも、やっぱりちよつと上がっているんだと思

った。少なくともうがい薬の入ったポシエットだけはどうしても必要だ。その中には相手の気が変わったときのためのコンドームなども入っている。低頭叩頭を繰り返しながらマヤが出て行く時の、皆の意地の悪い笑いがちよつと辛かった。はは、怖気づいたわけでもないだろ、マヤさん。帰ってくるよね！絶対、箆脱け詐欺なんかしないよね。

実は今日のマヤの計画が狂ってきていた。今夜は最後の仕事がへビーになるのを想定して、直前の仕事のあと一回分空けていた。午後八時素三十分で五人目の客を送り出した後、二時間半の余裕を作っていた。それでも今日は最後の逆マンジのおかげで一日八人の客をこなせるはずだった。しかしマヤが五人目の客を送り出すまでに事務所のほうで予約にミスがあったらしく、待たされた客が騒ぎ出すトラブルが発生し、結局その時間空いていたマヤにその客が押し付けられることになった。最近マヤの予約が取れなかった客だったので事務所は気を利かしたつもり、というより直前に指名されたソープ嬢が身体の不調を言つてマヤに譲つたということだった。マヤは状況が飲み込めないままにひきつづいて任務に就いた。

たいていの場合マヤはこういうことでわがままを言わなかったし、マネージャの命令には従っている。無理を承知で拝みたおされ、マヤの今日の計画を知っているはずの当の年長の同僚にはあざとく恩に着せられて閉口したけれど、そこはソツのないマヤだったから表面上は有難く（とはいっても、結構癖のあるその大柄の客を内心おだやかでなく引き受け何とか）無難に楽しませて送り出したわけだった。それにしても自室を一旦掃除したり、ずいぶん無駄に時間をつかってしまつて、二時間以上ゆっくりできるはずが逆にこのためのぎりぎりの準備時間しかとれず、肝心のポシエットを忘れてしまったのもそんな混乱した状況から無理もなかったということだ。なんだか最近おさまっていた同僚たちの売れっ子マヤいじめ、嫌がらせの再発のようでもあったけれど、実害はなかったし、売り上げが増えたマヤは文句は言えない。

「大丈夫かい？」と気遣う店長へ笑顔を向けて、マヤは平気へいきといいながら、あとでワインのワゴンサービスをと頼み、洋モクを何種類か持ち込んだ。もちろん皆マヤの負担だ。戻ってくる3人はもう奥の湯船に浸かつて仲良く首だけ出してこちらを眺めていた。そこで気がついた。あれ、頭のベールがない。

どこかで飛ばしてきたのに違いない。やっぱり何か変なんだ。しかし探しに戻ることもできずあらためて接客スケジュールの続き、みんなの要請に答えてストリップショーをはじめる。ぎらぎらした視線の中で微笑みながらひとつひとつ脱いでいく。頭のヴェールとリングはすでになかったの言い訳しながら省略し、くるりと一度ゆっくりターン。

「いいよ、ストリップパーマヤちゃん！」

大向こうの掛け声がかかり、いつもと違って観客が多いことにいまさらながら身が締る。

「ひひ、こりゃ、本番ストリップショーだな。」

誰かが地口をいれた。

胸までかかる長い茶髪（色抜きが進んで明るい色になっているけど、乾かす時間があまりなく、かなり重く湿っていた）の動きとあしらいがマヤの売りのひとつで、こだわりの女っぽさを強調する（ソープ嬢は髪が濡れるのを嫌い、おおかたがポップかショートなのだ。）まだしっとりしたそれを気にしながら上のミニジャケットと極小のサロンのようなスカートを帯ごと取ると既に透けて見えていたピンクのインナーが乳房と股間に頼りなくまつわりついているだけ。店としては決まった豪華なものがあったんだけど、今はそこだけは自由に勝手なものが選べるようになってる。今日のマヤはリオの浜辺で見られるような極小ひも水着風。もったいをつけて客をじらせたなら幾らでも時間が稼げる気がしたけれど隠微なダンスはあまり得意ではないので何度かステップを踏むうちにあっさり上下とも取ってしまった。ボトムは片ノットだったので解いただけでははずせない。座り込んでまっわった方の脚を高く上げてしごくように抜き取った。みんなの注目が熱い。崩れた表情はどうやら機嫌をなおしたようだ。

「あっけないストリップショウだったね。」

「もうちよつとしおらしくつてもいいんだけど、やっぱり、マヤはみられる事に快感があるんだな。」

「うん、いい身体だからな。腰も手足も細くて肋骨も透けてるのにおっぱいが大きくて、尻もちゃんと張ってて、グラマーじゃないがセクシーでバタ臭い身体だな。最高だぜ、マヤちゃん。」

「これがマヤちゃんの仕事着というか一糸まとわぬすっぱんぼんつてやつだ。」

「さあ、お仕事、おしごと、時間限定の乱交メーカークラブだよ。ちんぼこおつたててむらむらするのも挑発するマヤちゃんのせいだし、何の遠慮もいるものかってえこつたな。」

言うばかりで行動はいまのところ見られない。男の欲情と願望を身近に感じる、この時間がマヤには楽しく一番気がまぎれる、はずだったけれど、この違和感は何だろう。戸惑いのようなしらせ感、やはりいつもの一対一ではなく、男が3人で優位に立っているということからだろうか。いつもの男どもの子供のような賛仰の目が多少上目線なのが気になる。しかしマヤに気がかりなパーツはなかった。自慢の尖ったDカップの乳房、細い腰、綺麗な尻、締まった太ももと長い手足。ただ、見かけ緩みはじめたセックスだけが気がかりだった。自信を持たなければ。

「やっぱり、こんな美女で、きれいなハダカしてたら、ばあつと見せたい気持ちもわからあな。」

「マヤちゃんは美貌もハダカもあちこち公開してるんだ。堂々たるもんだ。」

「いい度胸だよな。」

「ねえちゃん、いやマヤちゃんだったか。どこかでストリップとかに出たの？パリのシヤンゼリゼの小屋で本番ショウとかしてもひけを取らないよ。いや、これセクハラか。」

「がんばるといった髪の毛の薄いこのひと、フランスに行ってショウを見てきたのかもしれない。」

ない。

ストリップパーとソープ嬢とどちらが格上だろう。本番嬢ならどっちもどっち？まあ、本番嬢といってもプロが相手のパリと素人客をあげる日本じゃ格もずいぶん違う、はずだし。地口が続いてポーズを取るのもわざとらしく思え、その場に座り込んだ。タイルの冷たさを股間の膨らみに感じながら脚を横へ投げ出し、精一杯のしなをつくる。何にせよ三時間あるからあわてることはない。お話は一番楽な時間つぶしだ。

「どう？何をご所望？最初は椅子洗いがメニユウなんだけど。」

「ねえ、そういうのはあとにして、マヤちゃんのワンマンショウを見たいなあ。そこではあつと何もかも広げて、見せてよ。ともかく俺たちをしっかりと立たせなきゃあ商売にならねえんだろ。」

もう何も隠してはいない積もりだけど。ま、いいか。一応もじもじしながら大股開き、W字開脚。

「バックがいいよ、バックバック、オオライ。」

背中を向けてドッグスタイル。振り向いて微笑を返す。

「いい、いいよな、若い美女のけつのあな、可愛い。」

「これが美女だから、すごい。」

何がすごいんだか。マヤは笑うしかない。

「マヤは娼婦なんだ、だから裸なんだよな。おれたちをたたせて即入れさせる。きれいな体の他に何もいらなくていいことだ。」

「マヤは美女で、ものわかりもいい。なんだってやってくれるし、やらせてくれる。」

「だからさ、なんとかしてくれって。風呂に入っておれたちといろんなこととして遊ぼうよ。狂わせてくれよ。」

「でも信じられないよ、こんな美女が、毎日、毎晩、男をとっかえひっかえ、よろしくやってんだから。」

「すごい美女がやっているから、すごい。夢の世界だ、ここは。」

正座で相對したマヤ。

「ふふ、夢みたい？」

「夢みたいな美女が、素っ裸で迫るんだから。」

「でも、夢ではない、現に金払ったからな。」

「金払っても、出来ないこともあらあな。」

「マヤは出来るんだ。不可能はない。凄い美女だ。」

「だから、なぞの美女、神秘的っていうのかな。」

「美女でも、可愛くても、お金がたんと欲しかったら、何でもするんだよ。」

「セックスもたっつぶり愉しめるしな。好色な美女ならいい商売だ。」

マヤも言う。

「普通の家庭の奥さんだってあまり変わらないと思うけど、女だから、やることは、ね。」

「うん、マヤもいうじゃないか。でもマヤは普通じゃないよな。」

「マヤの家族が普通なら、絶縁されているよな。」

「いろいろ訊かれるだろ、客に。どこの生まれだとか、以前は何をやってたのかとか。不思議なんだよ、マヤのような見事な美女ならもっと楽な生き方で、金も稼げたはずだからさ。立派な家族を持つて。」

「家族はいないのよ、私。だから自由に生きられて苦労は少ないわ。」

「苦労が少ない、のかな。」

「皆はあまり納得しないような表情だった。家族のいない人間はいないはずだ。」

「ここに居る理由は、やっぱりお金なのよ。女としていちばんてっとりばやいお金儲けだしね。」

「結局娼婦ってお仕事が私には向いてるのよ、そう思わない？」

「言われるよりも自分でいうほうがまだ疲れない。にこにこ笑って“私、娼婦”というマヤは自分でもけなげに思える。」

「裸を見せるのが生きがいだとか。羞恥心がないとか？」

「マヤがけちのつけようがない美女だからそう思うんだろうけどな。」

「そうじゃなくって、やっぱり男が好きだから。」

「結婚も終身の身売りだって見方もある。法律や社会慣習で認められた身売りだ。娼婦は祝福される身分ではないし、むしろ世間としては犯罪に近い、認めたくない職業だ。」

「多分、マヤも昔の知人は皆見向きもしないとおもうよ。」

「その分結構実入りのいいお仕事なんだけどね。それで引き合うかどうかはひとそれぞれだ。」

うん、ビミョウな問題だ。マヤは黙っていた。

「娼婦って、結構隠微なおしごとなんだよ。以前は布団の中でやらせるだけで、ハダカを見せることはなかった。マヤはその点ストリートだ。」

「見せられるもんな、何もかも。恥知らず、露出癖の美女。」

「乞食とストリップパーは3日したらやめられない、らしい。慣れば身体だけで誰にでも出来るものなんだな。」

「でも、お風呂じゃあ、ハダカは当たり前でしょ？」

「風呂屋の湯女は江戸時代からあるんだが。」

「ハダカの客に浴衣の女が商いをしかけるんだ。」

「ハダカのマヤの商いはセックスサービス。」

「いい商売だとおもうけど、美女で、健康でなければ辛いよね。」

「美女のマヤだから良い商売になる。」

「やまさんが調子を変えた。いや、変わらなかつたけれど。」

「あがりなんだよね、これでマヤは。今日は何人こなしたんだ？その体ひとつで。」  
にこにこしたままマヤはみんなの表情を見回す。



「そのまんこで、という言い方もあるね。」

「まんこがフル回転だった。」

「よく剥けずにもつもんだ。」

「けつのあなも使わせるんだ。ダブルサービスマヤだ。」

「楽しみだよな、マヤもそうだろう？」

マヤも反撃する。

「楽しみというより、どきどきよ。まんこも、お尻の孔も身のうちだし。だから、壊さないで、大事に扱ってほしいのよ。」

「おい、くぎをさされたぞ。自由に使えないのか。」

「ちゃんと洗ったかい。先客のものは残っていないだろうな。」

「でも、すぐけろりとして次ぎの客の前に出てくるんだから、すごい。」

「まだときめいているんだろ、前客が忘れられないとか、ね。」

多少ひっかかるけど、機嫌を悪くするわけにはいかない。意地の悪い客の挑発には乗らないことだ。人気のあるソープ嬢は裏を返せばそれだけ大勢の男の手垢で汚れているという意識があつて、こちらのほうが気分を張り続けていなければそれだけで落ち目になる。自分の身体が汚れているという意識は持たないことだ。

「まあ、引っ張らないのが私たちのコツなのよ。良くないことばだけれど割り切るつてことね。その場かぎりのラブ…。」

「本気の恋愛はご法度、ってアイドルタレントみたいだな。」

「でも、なじみ客にはそうでもないだろ。」

「もういいよ、いいからこっちにこいよ。一緒に風呂に入ろうよオ。」

まず椅子洗いをと水を向けたマヤに皆が乗ってこない。仕方なく彼女は立ち上がった。

湯船に入るのは気が進まないけれど、潜望鏡でもしてあげようか。

湯船はいつもと違って高さ十センチほどの縁を隔てて洗い場の床から落ち込んでおり、立って近寄るマヤの眺めが最高だと皆言う。ぺたりと風呂の際に座り込んでかかり湯をする。濡れた裸身がよりセクシーだと言い、皆の視線がまた股間に集中する。しかしまだマヤは湯船の際で正座をしたまま笑っているだけだ。

「お風呂で興奮したらお体に悪いかもね。」

「心臓に悪いって？ここでおっチンだら男は本望だな。」

「すぐ死ねばいいけど、脳で出血したりしてお体が不自由になったら困るじゃない…。」

「じゃあ、そこでオナニーでもみせてくれるかい。おれたちのためにさ。」

『一度なり気をやってくれたらそこへあがつてやるよ。』  
ますますワンマンショーに近づく。

「いいわ、やったことはないけど、真似事ね。」

「本意気でやってくれよお。」

正座のまま股を九十度開いて右手を差し込み、左手は乳房にあてる。目を瞑ってゆっくり

と手指を動かし始める。いずれたまたまなくなって湯からでてくるという算段だけれど。

「いい、いいよ、マヤ。もつと、もつと本気で、むちゃくちゃやっておくれ。」

マヤにとつては、いちいち気に障ることはあっても、会話だけで時間を潰すほうが疲れは少ない。今日もいいほど湯通しした体だ。できれば湯へは入りたくはない。まだオナニーショウのほうがいい。自分のペースでできる。ぐつとのけぞって下肢を伸ばし両手を股間の前後から差し込んで特徴を蔽って強く押さえ、前後の孔へ大胆に指を入れる。半ば無心でゆさゆさ動かすうちに床に仰臥の形になって、目も瞑っていたので男たちが湯の際まで来ていることに気づかなかつた。

「いい、いいよ、マヤのオナニーショー、迫力あるー。」

「なあ、ずいぶんな仕事をこなして疲れてんだから、彼女、あまりいびらずに、早く風呂に浸からせて、ゆったりさせてやれよ。」

やまさんの一声でマヤもこれ幸いと中断し、起き上がった。

「いいのよ、皆さん、ゆつくり浸かっついて。私は準備…。あ、」

立っついこうとするマヤの細い足首をひとりか掴んでむりやり湯に引きずり込んだ。もつとも、暴力的になるまでにマヤが折れたから、尋常な入り方になった。周囲に3人が群がり密着して、湯の中では6本の手腕と同数の毛すね足がマヤの首下のあらゆる部位を探り、乳房や尻、股間ををなぶりまわす。だれの手なのか足なのか、判断に苦しむので敵も大胆になる。

「見るのもいいけど、こうやって触るのもいい。マヤの肌はいい。」

湯の上ではとりあえずさほどのことはない。お互い息が感じられないほどの距離は保たれている。覚悟していたマヤも取り乱すことなく、出来るだけ優しくあたろうと刺激に耐え、平然としている。湯の中で既に堅く屹立している左右2人のものを両手で探り当て、握りしごき、正面のりょうさんには足で挟んでやわやわとしごく。

「マヤさん、こうして見ればみるほど、美女だなあ、ほんのり赤くなって、可愛いよ。」

「ありがと。だったら、私の言うとおりにして。貴方がたをサーヴィスする時間なのよ、今は。潜望鏡、順番にやっただげるから…。誰が最初かしら？」

名乗りをあげて湯面左に立ち上がったガンさんの屹立した逸物へ顔を向けぐぼと一挙に呑む。お互いの動きも大きく、数分もせず感に絶えぬといった風ですでに痙攣をはじめた気配。これは楽勝かも。

と思つたら、後ろに回ったりようさんが機を見てマヤの身体を毛脛で挟み込み細腰を両手でつかむ。ガンさんがそれに加担して腰を突き出し、更に深く口を封じられたままのマヤの隙をついて自分の腰に乗せ、真下からあつけもなく自身の大きなものをずぶりと一気に押し込んでしまった。

「(あつ、私にサーヴィスするのは、いいの、いいのって、…。)」

口にはおぼったままのものを思わず吐き出そうとしたけれど、当のガンさんが挟み撃ちよろしくマヤの小顔を両手で保持し、攻撃的になって逆にのどの奥まで押し込んできた。

うぐっ、

ほとんど根元まで入って、結果亀頭が喉を通過して恥毛とおう吐感の不快にむせそうになるのを必死で我慢する。

それぞれいつもの慣れた行為とはいえ、膣内への痛みに近い異物感（マヤにははじめての男のものだった、初夜？）の衝動と重なって力ではかなわないマヤは、声も出せずちよつとあがいたものの、まだ気分には余裕があつて、体全体で反応してしまったことを口惜しいと思つた。まあ、なるようになれだ。マヤはできるだけ体力を使わないようにして男たちに身を任せた。湯に浸かつたマヤの小ぶりの尻をがっしり掴んだ後ろのりようさんは、多分運動系の男だったのでだろう、やりかたが半端でなくその強い握力で痛いほどにマヤの柔らかな肉へ手指を食い込ませたまま、しかも自在に上下前後と揺さぶり、水中での抵抗もものかわ大きなストロークを繰り返すのは上体の筋力と持続力の誇示だろうか。マヤも辛かつたけれど、せめてものプロの意地を見せて、しつかり絞め込んで抵抗する。男は狂奔の体をしばらく続けてひとまず退出した。やれやれ、と思つたらすぐ正面にいたやまさんが尻の下に下半身を滑り込ませて抱きついてきた。正攻法のアタックだマヤはまだガンさんのものを口にはおぼつたまま、頭髪を束ねて頭頂でしつかりつかまれ保持されたままでもり入ってきたやまさん。相変わらず大きい、その強いあおりでガンさんが口から離れ、しばらくやまさん一人の独壇場になる。一月前の湯舟ファックを思い出した。2本目の休まない攻撃で唾もクリームもつけられなかったし、お湯自体は頼りにならずただ彼女の潤沢な分泌液だけが頼りだったけれど、それも湯の中で洗い流されるのだろう。たまらなく痛くなってきた。しかもその最中、背中から前後挟むように抱き付いてきたのは今離れたばかりのガンさんだろうか。彼はやまさんに聞いたものか知つていたのだ、マヤの特技を。最初三本指でさぐりを入れたのは最小限のエチケットだったけれど、すぐ格別に大きなものがみりみりという感覚とともに押し入ってマヤの頭を真っ白にした。つうつ、初めてのダブル挿入体験もこんな湯の中ではよく味わう余裕はない、無茶、無茶よ、ああ、痛い、裂けそう……。

しかしそんな中でもりようさんがガンさんの先刻居た場所に入れ替わって立ち、マヤの小顔をねじつてその顔面へ押し付けたものを躊躇もなく受け入れ啞え、あわあわと吸い込んでいくマヤのプロ根性はどうかろう。りようさんもそれに乗じて無慈悲にもこつんというような彼女のどの狭隘部へ押し込み抜き戻すという難行を強い、その快感を何度も味わっている様子だ。もちろんマヤには辛いばかりだけれど、こんな身体を張った性技をやるのは自分しか居ないというプライドが彼女の忍耐を持續させているのだろうか。

当然ながら性愛の姿は愛する二人だけのトラブルに近い秘密の事態で、本来他人にはとても見せられないぶざまな姿でもあるのだけれど、それはプロの性愛仕掛け人であるマヤだつて同じことだつた。だから今マヤが強いられた人間の様態とも思えないむごくも悲壮な3穴同時占有状態がそれによつて誰にも冷静に見られていない、みんながひとしなみに熱

い当事者になったのだというマヤなりの自己満足、安心感もそれをあとおししたようだった。

でも、男たちにはまた別の思いもあるのかもしれない

「いいぞ、いいぞ、これで3穴同時にラッシュ完頂じゃあ。」

「それ、それ、それ。」

逆巻く湯の中で3人の猛った男たちによって押し潰され揉みひしがれさんざんに攻め抜かれたマヤの、多分主に窒息の恐怖からの真剣な取り乱しと苦悶を本意な性感のたかぶりと勘違いした男たちのためにそれが危険なほどに続き、彼女がとうとう失神し記憶を途切らせたのは、ボトムの人2人が同時に狂おいたつぷりと抽送して満足し女体から手足を解いたときにもなお達しなかったりようさんが意地きたなくもマヤのスロットにこだわっていたからだろう。しとど身を揉み続けていた熱いマヤは急にぐったりとなつて、湯の中へ沈みかかった。こん、と湯のへりで頭を打って、さすがにすぐわれに返った。ようやく開放された細身を自力で湯ぶねから抜いてタイル床に這い上がり、身を折り、濡れそぼったままの髪も乱れたまま、息の乱れもしばらく収まらない。半ば開いた股間からまだ白濁した液が漏れ滴っているのを感慨もなく眺めている。誰のものだろう。

「おいおい、しつかりしてくれな。まだ第一ラウンドだぜ。」

「おれは抜いてもいないんだ。」

不満そうに隆々たるものを見せつけるのはりようさんだ。

「飛ばしすぎてちよつとのぼせたんだろ。ともかくダウンはとつたよ、一回は。」

「せっかくだから、タバコ、もらうよ。マヤ、君も吸うかい。」

火をつけたキャメルを半ば開いた厚めの唇に挿し込まれて、はっと大きな目を開き、自分の立場を了解しようだった。ドアをノックする音がしたのと同時だった。

「あら、ごめんなさい。」

上半身を起こし、案外しつかりしたしぐさで立ち上がると、タオルも巻かず、濡れそぼったままノックのした方へゆっくり踏み出していった。待ちかねた店長が酒の入ったワゴンを押し込んできたのと鉢合わせした。

「お待ちどうさま。あれ、顔色が悪いよ。無理しなさんな。」

笑った積もりだったのだけれど、口元がひきつただけだった。なお肩で息を継いでいるマヤは急に立ったこともあり、声をだすのも辛いほどだったのだ。ドアが閉まったあと、ワゴンにつかまるようにして一息つき、更衣室の時計を盗み見る。ああ、まだ12時にもなっていない。あと2時間がマヤにはいつになく遠いゴールに思え、向こうでタバコをくゆらす3人のはだかむしを恨めしくも思ったのだった。

